

2020. 11. 22 第三主日世界宣教礼拝

ローマ 10 : 11-17 「伝える人がいて聞く人がいる」

聖書

11 聖書はこう言っています。「この方に信頼する者は、だれも失望させられることがない。」

12 ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。同じ主がすべての人の主であり、ご自分呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになるからです。

13 「主の御名を呼び求める者はみな救われる」のです。

14 しかし、信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。

15 遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」と書いてあるようにです。

16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか」とイザヤは言っています。

17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。

はじめに

11 月は教団の世界宣教のために祈りをささげる月となっています。礼拝や祈祷会、またはその他の集会の中で各宣教地の報告に触れることが求められており、私たちの教会では毎年礼拝の中で DVD の宣教報告に耳を傾け、祈りの時を持っています。今年はコロナ禍の中ですが、例年と同じように宣教報告に与ることができましたことを感謝します。DVD には平瀬宣教師の宣教メッセージも含まれていますが、礼拝時間の都合今日は割愛させていただきました。平瀬宣教師のメッセージは今週木曜日の祈祷会でお聞きしたいと思っています。

現在教団からは6か国に宣教師を派遣しています。各地の宣教報告とコロナ禍での現状を教えてください、お祈りと共にそれぞれができる支援をもって世界宣教に加わりたいと願っています。

1. 伝える人がいる

宣教とはキリストの福音、すなわち十字架と復活のメッセージを人々に伝えることです。対象とする地域が国内であれば国内宣教と言いますし、海外であれば海外宣教とか国外宣教と言います。私たちの教団では世界宣教と呼んでいます。宣教は神さまご自身の働きですから、神さまが主導的に働きを導かれるのですが、そこに私たちが「伝える人」として加わることが求められています。

神さまは言われます。「ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。同じ主がすべての人の主であり、ご自分呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになるからです。『主の御名を呼び求める者はみな救われる』」のです。(12, 13節)。民族や人種によって個別の神がいて、個別の救いがあるわけではありません。主はすべての人の主です。そして誰でも主の御名を呼び求めるなら救われるのです。人は潜在的にこの単純明快な救いの道を求めているのではないのでしょうか。実のところ、多くの方は自分が救いを求めていることさえ気づいていないかもしれませんが、誰もが救いを求めており、その救いがイエスさまの救いと結びついていないだけなのではないのでしょうか。もしそうなら、人々が求めている救いとイエスさまが与えてくださる救いを結び合わせる人が必要です。それが、宣べ伝える人の役割であり、その役割がクリスチャンには委ねられているのです。

2. 聞く人もいる

宣教は伝える人と聞く人がいなければ成り立ちません。しばしば宣教が困難だというとき、まるで聞いてくれる人がいないかのように思ってしまう

すが、そうではないです。人が誰もいない砂漠でイエスさまのことを叫んでいるならそうかもしれませんが、私たちは砂漠で宣べ伝えているではありません。聞く耳を持った人たちの間に住んでいます。「信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。」(14 節)とされているように、聞く耳を持った人たちは確かにいるのです。

その人たちに福音を届けることができるのは、福音を知っているクリスチャン一人一人です。イエスさまはクリスチャン一人一人を派遣したく願っておられます。なぜなら福音を知っているからです。かつて肉体の制限を受けられたイエスさまも一人で町々を巡ることができないので、弟子たちを二人一組にして町々に派遣したのです。派遣の主は今も同じ方法でクリスチャン一人一人を派遣してくださるのです。「遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。『なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は』と書いてあるようにです。」(15 節)。世界に派遣される導きを得た宣教師はその使命を帯びて出て行きました。国内に遣わされる導きを得た者は牧師となって国内の教会に遣わされました。遣わされる場所も異なっても派遣された者という意味では国内外問わず同じです。それゆえに宣教師または牧師のために祈り、支えていただきたいのです。

3. 身近な人に伝えよう

遣わされる人は宣教師や牧師だけではありません。実はすべてのクリスチャンがすでに世に遣わされた者です。日本では伝える人と聞く人のバランスが極端に違っています。クリスチャンの数とそうではない方の数が大きく違います。違うことを否定的に考えるのではなく、届けたい人たちがいるということであり、十分に伝える意味があるということではないでしょうか。10月に行われた第3回目の伝道セミナーでオイコスマップを作成してみましようとお話がありました。オイコスマップとは、自分を中心にして、誰かイエスさまのことを伝えたい人の名前を書き、自分とその人を線で結びます。そ

してその人のために祈り福音を伝えます。するとその人が別の人に伝えるということで、自分から始まった福音の広がりが網の目のように広がって行くことをイメージできます。具体的に一人、二人のために名前を上げて祈り、福音を届けてみましょう。イエスさまも言われます。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」(Ⅱテモテ4:2)。たくさんの人に伝える必要があることは承知しています。しかし、目の前の一人の人のために祈り、その人に福音を届けることが大切に思います。大きなビジョンや理想を掲げることは良いですが、目の前の一人を忘れてはいけないと示されています。このことは今進めたいと願っている「くびきの会」にも通じます。目の前の一人を大切に、主の助けと導きを仰ぎましょう。

まとめ

今日は世界宣教に目を向けています。世界という広い畑を前に、私たちは何もできないと感じるかもしれません。しかし、目の前の一人を大切にしその人に福音の恵みを届けることが、世界の働きにも通じているのです。もちろん教団から派遣されている宣教地たちを覚え、祈りと財をもって支えることは必要なことです。毎月の世界宣教献金、コイン献金、宣教視察など、各自が示された導きの中で宣教に携わりたいと願っています。国内外にこれからも福音が届けられますように祈り、宣教の働きに加わりましょう。